

赴き、新生活をスタートさせた。私はラジオのパーソナリティという、社会的にも責任のある仕事に就いて、毎日を生き甲斐を持って過ごしている。これも、父、母、姉たちの温かい支援があつてこそ与えられたものと思ひ、感謝している。

旅順、大連での体験

静岡県 仲野 和 夫

明治四十五（一九一三）年、日露戦争の結果、日本の租借地となつた旅順へ、父は大きな夢と希望を持ってやつてきた。旅順には関東州の州庁があり、軍関係では関東軍指令部や海軍要港部などがあり、その他小學校、中學校、女學校、それに工科大学が全滿州で一番最初に開校されるなど、官民そろつて新しい街づくりに力を注いでいた。

父の職業は齒科医師で、旧市街の教賀町で診療を開始した。当時数少ない職業であつたので、州長官をはじめ

め多くの「長」の付く方が来院されたということを、母から聞いていた。

旅順に亡命していた清朝末期の肅親王、愛新覺羅善老も大勢のお供を連れて来診されていて、十四番目の娘、川島芳子さんと顯孛も馬に乗つて治療に来られては、母と部屋でよくしゃべつていたそうだ。

また、当時としては恐れ多いことだったので、両親は一切他人に話はしなかつたが、広島島の呉、朝鮮の鎮海、中国の青島の各軍港とのリレー連絡で、閑院宮殿下が旅順に寄られた時には、齒の治療を仰せつかつていたそうだ。その当時、旅順は各界の有力者が必ず立ち寄る所で、政界、相撲界、書家、画家と多士済々の方々が旅の途中に寄つて行かれた。

宮様のご来診にあつては、一週間以上も前から医院ならびに従業員の身体検査があり、当日は警官が多勢護衛に立ち、町にも行列ができた、と終戦後自由話せるようになってから母が教えてくれた。

大正十一年に、病院を教賀町から名古屋町六番地に新築移転した。広々とした診療室で、そこからは旅順

病院の建物や、その上の丘にあった加来先生の屋敷や、高等法院がよく見えていた。

私が生まれたのは昭和三（一九二八）年で、一番小さい時の記憶は五歳くらいの時である。旅順幼稚園に入園して、遊戯室でリズムに乗ってスキップをしながら走り回ったことと、太っていた田中園長の笑顔が忘れられない。また、我が家の風呂場の脱衣室で、姉の二三子から大きなポケットの付いた前掛けを作らせてもらったことも、忘れられない思い出である。

新しい我が家には、中国人従業員用にオンドル付き、トイレ付きの家が造ってあり、数人のボーイさんが住んでいた。何かにつけて両親がよく面倒を見ていたので、私は中国人従業員にも非常にかわいがられていた。まだ小学校に入る前の話だが、一人のボーイが両親の許しを得ずに、黙って私を自分の親のいる中国部落まで五キロメートルほどの道のりを歩いて連れて行き、部落長の家と思われる所やその付近の家々を案内してくれた。最後にそのボーイの家で、彼の両親に大変ご馳走になった。そのときに使った箸がとても長

かったことが、今でも印象に残っている。

その夜はそのままその家に泊めてもらい、オンドルのある部屋で床に就き熟睡した。私の両親は、そうとは知らずに私が夜中になっても帰ってこないので、随分と心配したそうだ。当時は、こんな時はサーカスに売り飛ばされるのではないかという噂があったので、本当に心配したようだ。真夜中になって、周囲が騒々しくなってきた。当時めつたに見ることのできない乗用車が部落の道にやってきたので、黒山の人だかりとなった。私は寝ぼけ眼だったが、父が私を捜しに来たということが分かった。父もほっとした様子だった。父の手からドロップの缶を渡された記憶はあるが、家に帰り着くまでの記憶が一切ない。きつと父が迎えに来たので安心し、疲れが出てぐっすり寝込んでしまったのだと思う。

もう一人別のボーイで「ヒン・ギャーイン」と呼ばれていた人がいた。どういう漢字を書いたのか、父のいない今となっては全然分からないが、なかなか忠実に働く人だった。今でも顔をはっきりと覚えている

が、残念なことに結核にかかって亡くなってしまった。父は、中国式に盛大に葬式をあげて、内側に金属板を張った立派な分厚いお棺に入れて、中国人街にある趙家溝の小高い丘に埋葬をした。種々の紙を燃やして、お別れをしたことをよく覚えていて。

私の家では、日常の食事に関しては一切差別がなかった。中国人のボーイも私たち家族も、皆同じお櫃から白米のご飯を好きだけ食べていた。

同じように漢字は分からないが「ムー」という別のボーイがいた。ムーが納屋の米俵から時々白米を盗んでいるのを見つけて、父はムーを解雇することにした。本人は絶対に盗みなどはしないと言い張った。出身地の山東省から働きに出てくる時、自分の父親が「日本人から技術を盗んでこい。物を盗んではいけない」と言われてきたので、自分は米など盗んでいないと言い張っていたが、結局は周りの者への見せしめもあって、辞めさせることにした。父は、そのボーイのために長年ひそかにためていた貯金通帳と印鑑を手渡した。ムーは涙を流していたが、心の中はどんな様子

だったのだろうか。私は、父が雇っているボーイたちの将来のことを思つて、内々に貯金通帳を作っていた気持ちに感動したものだ。

旅順の市街は静かで上品で清潔で、生活環境は実に素晴らしかった。街で聞こえる音といえば、往来している馬車の蹄の響きくらいのものであった。生活環境の良い教育都市、住み心地の良い別荘都市、そして近くに山あり海ありだった。郊外にはリング園が連なり、ウズラ狩り、ウサギ狩りも盛んで、旅順の港内での蟹釣りは特に楽しかった。冬ともなれば池という池は全て結氷し、一斉にスケートリンクに変わった。そのように、旅順は春夏秋冬を問わず私たちを楽しませてくれた。五月ともなれば街路樹のアカシアが開花し、辺り一面は甘美な香水をまいたような芳醇な香りいっぱいだった。蜜蜂がアカシアの花の蜜を好むように、子供たちもアカシアの木によじ登って、花のめしべの蜜を吸ったりしていた。また、グループを作つてアカシアの葉っぱを一枚ずつちよん切つて勝ち負けを競ったり、占いをしたりして遊んだ楽しい思い出がある。

初夏になれば、釣りに夢中になった。鮒釣りは、黄金台海水浴場への途中にある海軍防備隊の富士池で、隅から隅まで知り尽くしていた釣り場だった。学校から帰るとすぐに、餌作りに取りかかった。旅順の鮒は酒好きとみえて、メリケン粉に酒を混ぜてよく練り、適度な硬さにしたものが一般的な餌作りの方法であった。近所に住む同級生の谷君と、二十分のほどの道のりをよく出かけたものだ。富士池は、どの場所も入れ食いの状態で、行くと数十匹の鮒を釣ってきた。谷君の家にあった、しゃれた樋作りの金魚鉢では全然間に合わず、大がめを買ってもらい、我が家の庭でも飼育したことがあった。

我が家の隣で、琴と三味線のお店をやっていた根元のおじさんは大型の鮒釣りの名人で、朝暗いうちから出掛けて釣っていた。おじさんは鮒の甘露煮が上手で、とてもおいしかった。理由は分からなかったが、戦局が悪化してくるにつれて、雷魚が増えて鮒が釣れなくなり、次第に富士池に行く足も遠のいてしまった。

海釣りにも夢中になった。我が家から名古屋町を通って乃木町へ行くと、通い慣れた幼稚園の角に井上釣具店があり、そこで餌と釣り針、おもりなどを買って、海軍要港部の前の突堤に行った。突堤の周辺には、ボラやアジやその他いろいろな魚の群れが次から次へとやってくる。その群れの中に糸を垂らすのだが、魚の方がなかなか相手にしてくれない。そこで今度は、岸壁に添うようにして糸を垂らすと、メバルやアイナメ、ドンコなどの小物がたくさん釣れたので、それで満足して喜んでいた。ときには、中国人船頭に小銭を渡して、突堤から対岸の老虎尾行きのジャンクに乗り、対岸でチヌ釣りに挑戦することもあった。この辺りに近い湾内では、大型の蟹が大量に捕れることで有名であった。自転車の車輪に綱を張って、安い魚（例えば太刀魚などの切り身）をくくり付けて、水深十メートルほどの海底に下ろし、しばらくの間放置しておく。頃合いをみて素早く引き上げると、案の定数匹の蟹が引っ掛かっている。その日は家族皆で蟹をたらふく食べたが、我が家だけでは食べきれないので、

近所の家にお裾分けした。

昭和十年四月、私は、旅順第一尋常高等小学校に入學した。担任の先生は勝尾貞藏先生といって、長さ三十センチメートルほどのカイゼルひげを生やしていた。ベテラン教師だったが、私にとってはそれからの三年間は相性の悪い先生であった。三年生の夏、まだ泳げなかった私は、プールの一番深い所に投げ込まれ、それ以来水に対する恐怖心が非常に強くなってしまった。

四年生になって、担任が原先生に変わった。下顎が少々前に出ていて、横から見ると三日月型の容貌の優しい感じの先生で、私も勉強がとても楽しくなった。その年の七月七日、盧溝橋事件が起こり、日中戦争の始まりとなった。教科にも中国語があり、「我」「你」「去」「来」などの基本語からの学習が始まった。

五年生になると、希望者が数人集まって放課後に剣道を始めることになった。毎日、体育館に隣接していた剣道場で練習に励んだ。翌年には、「先峰」山岸、「二将」庵原、「中堅」坂水、「副将」牧野、「主将」仲

野というメンバーで「関東州小学校剣道大会」に初めて参加し、善戦して準優勝を獲得した。

昭和十五年には皇紀二千六百年で、日本は国を挙げての慶祝で沸き返り、内地では各地で盛大な祝賀会が行われた。旅順でも大勢の人が表忠塔の立つ白玉山に登り、納骨堂の前で皇居遙拝や、武運長久を祈った。

この夏には、海洋少年団の団員の中から選ばれて、中国の山東省方面で活躍していた日本海軍陸戦隊の慰問に行くため、駆逐艦に乗って一週間ほどの旅行をするという減多にない好機会に恵まれた。最初の寄港地は、芝罘（イヅミ）で、次いで威海衛（イヅミ）に寄り、最後は青島だった。青島のある膠州湾（コウシュ湾）に入った時は、霧が立ち込めていて視界がほとんどなかったが、青島港の近くになってやっと右舷から青島の景色が見えた。それは、本で見たヨーロッパの風景のように色鮮やかな家々が連なり、おしゃれな街に見えた。それもそのはずで、青島は以前はドイツの租借地だったからである。私たちの乗った駆逐艦は港の奥へどんどん進んで行くうちに、左手方向に明るいネイビーブルーの艦隊

が停泊しているのが見えた。艦長に聞いてみると、一番大きいのがアメリカ東洋艦隊の旗艦「オーガスト」ということだった。翌年、日本とアメリカは戦争に入したが、開戦の一年後の昭和十七年、南太平洋において「オーガスト」は日本の飛行機に撃沈された。しかし、その時はまだ威風堂々とした姿であった。駆逐艦はそのまま米艦隊に並行して、港に向かって進んで行った。こういう場合、両艦は艦尾の旗をお互いに下げて挨拶をすることが世界の船乗りの共通のこととなっていたが、相手が気がつくのがちよつと遅かったのか、我々よりも少々遅れて、慌ててアメリカ兵が星条旗を下げるのが見えた。着岸してやつと上陸ができて、海軍の宿舎に直行し歓迎を受けた。それからトラックを出してもらって、青島市街の見学に行った。あか抜けした街の外れには、ドイツ軍が築いた砲台の跡が見られた。この頃は、日中戦争が始まって三年ぐらい経っていて、そろそろ生活物資の節約が叫ばれ始めていた。旅順でも砂糖などがだんだんと少なくなり市街でも見かけなくなっていたが、ここ青島では角砂

糖がショーウィンドーに山のように積んであった。そればかりではなく、夜ともなれば市街はネオンが華やかで、キャバレーのある歓楽街にはアメリカ兵たちが行き来しているのが見えた。私たちが泊まった海軍の宿舎は二段ベッドで、兵隊さんと同じく消灯ラッパで就寝した。台風の接近で青島の帰りは曇りがちの日が続く、沖に出るほど波も大きくなり、大方の仲間は嘔吐をもよおし、胃液までも搾り取られるような状態であった。付属小学校から参加していた松村君は、この催しで知り合った仲間だが、私の船酔いざましのために家から持ってきた梅干しを、親切にも瓶から出して分けてくれた。その梅干しのおかげで、胃が随分と楽になったことを覚えていいる。

渤海湾ボツカイに入ると、黄河から流出してくる土砂で全面が黄色と化していた。航海中に一番困ったことは、艦内のトイレであった。狭い部屋の壁に、腰掛けるような形に四つの穴があいた鉄板が溶接してあり、ここに四人ずつが肩をすり合わせて用を足すのであった。これは、狭い艦内を有効に使うための工夫であった。

私は出航以来、生まれて初めてのいろいろな体験によって一週間余り排便がストップしてしまい、随分と苦しんだ。私個人としては、船酔いと便秘との戦いであった。駆逐艦での航海も無事に終わり、旅順港に帰港し、すぐに帰宅して皆を安心させた。それから二日ばかりは、腹の中の固まりを出すのに大変苦労したことを覚えていいる。

九月から二学期が始まり、九月二十七日に日独伊三国同盟が締結された。

私は昭和十六年三月に小学校を卒業し、四月に官立旅順中学校に入学した。早速、各部の勧誘が始まり、私は何の迷いもなく剣道部に入部した。体格が良く目立っていたので、相撲部からも誘われ入部した。その頃の学生は、必ず応援歌の練習をしなければならず、上級者からのしごきもひどかったようだが、相撲部は応援歌の練習が免除されていたので大助かりだった。しかし、相撲はたいして強くなかったので、中学校対抗戦には補欠で出場した。剣道の方は、関東州中学対抗戦に毎回出場し、一年生の時には大連中学と決勝戦

をして準優勝した。二年生では、大連一中の道場で実施された勝ち抜き戦で、十数人を勝ち抜いた。三年生の時は、大連三中の道場開きに、旅順中学を代表して招待され、準優勝した。四年生になると、勤労働員が始まり、時勢の影響を受けて銃剣道に熱を入れるようになっていった。

昭和十七年になると、剣道仲間の牧野君が陸軍少年飛行兵学校へ入校し、同じ仲間の坂水君も陸軍幼年学校へ入校した。私の周囲でも、だんだんと陸海軍の諸学校へと進んでいく人が増えていった。

中学生にも学徒勤労働員が始まり、私たち旅順中学の者も大連甘井子地区にある満州化学工業の工場で、爆薬などの原料である硫酸、硝酸の精製の仕事に携わった。それぞれの工場には、大小のパイプが張り巡らされていて、酸性の異様な匂いが立ち込める仕事場だった。あらゆる場所に酸性の液体やその蒸気があり、一週間もすると着ていた作業服は穴だらけとなり、下着が見えるようになってしまった。部署には、徴兵で日本人青年はいなくなり、年配の熟練工が数人

と中国人二人だった。その二人のうちの少々年配の方にはこやかな顔をしていて、わからないことは親切に教えてくれた。もう一人は、趙さんといって硝酸の係をしていたが、前歯が突き出し目玉がぎよろつとした青年だった。彼は、日本人上司の人使いが荒いこと、給料の安いことなどの苦情を、唾を飛ばしながら盛んに言っていた。

夜間勤務の時、麻袋を衣服代わりにして、すすと垢で汚れた一人の中国人の苦力クワリと出会い、同級生の後藤君と片言の中国語で会話をした。長話はできなかつたが、時々会って話をするようになった。靴は履いておらず、わらを足に巻いていた。硫酸の染み込んでいる場所を歩くことも多いだろうと、破れて不要になった私の地下足袋をあげたら随分と喜ばれた。ある時、出身地などを聞くと、上海育ちで上海のクリスチャンのハイスクール出身ということが分かった。それ以後は、片言の中国語に片言の英語を交ぜた会話をするようになった。時には、彼がトウモロコシを粉にして作ったピンズを持ってきたこともあった。表面にはほ

こりが付いていて不潔に思ったが、私たちも食糧が不足気味だったので喜んで食べた。この人は、解放後はきつと立派な幹部になっただろうと思っている。

工場に動員中、一度だけB29の空襲があり、大連市内に爆弾が投下されたことがあった。被害は軽微だったが、だんだんと戦争の厳しさが迫ってくる感じがした。

工場は陸軍の監督下にあつたので、時折若い将校が監督官として見回りに来たが、その将校が雑談として皆を激励するように、「今に米本土に爆弾を投下できる新兵器が登場する」としゃべったことがあった。後に風船爆弾のことだと分かったが、戦況はあまり芳しくなかつたようだ。工場での一日の労働が終わり、宿舍への帰り道に風呂屋に寄つた後、絞ったタオルを手になぶらげながら中国人の小吃店に立ち寄り、煎餅に得体の知れない肉をのせたものを買い求め、食べながらそしてしゃべりながら宿舍に帰るのが唯一の楽しみであった。大連の冬は寒いので、宿舍に着く頃にはタオルはかちかちに凍って棒のようになっていた。

昭和十九年になると、軍事教練にますます熱が入り、さらに防空演習が頻繁となってきた。その上、日本近海はもとより、東シナ海にも敵の潜水艦が出没して、我が方の船舶の被害が増えてきたという情報が聞かれるようになった。上級学校に進学を希望する者の多くは、日本本土への進学が危険視されてきた。したがって関東州や満州地区の大学、高等専門学校に絞られ、当時は入学しても文化系は早めに徴兵されるので、希望校の選択には皆苦勞していた。

私は、自宅から十分もかからない官立の医学専門学校を選び、無事に入學した。この附属病院は、私が生まれたところであり、赤ちゃんコンクールで表彰されたところでもあり、さらには腕白坊主の頃にケガで度々お世話になったところでもある。四月に新学期が始まったが、この年に入学した高等専門学校生全員は、四月から六月まで旅順市郊外の土城子トシゴの飛行場建設に動員されることになり、全員が共同宿舎で起居を共にすることになった。我々医専生に割り当てられた仕事は、全学生の朝・昼・夜の三食の賄いであった。

他の学生より二時間は早く起きて米を炊き、決められた献立の料理を作らねばならなかった。食糧は配給で種類や数量も限られていて、おやつもなく、育ち盛りの若者にとっては辛いことで、鍋の底にくっついた焦げ飯を何とか手に入れようと要求する者も多かった。土城子の動員学生は、総数五百人くらいはいたであろう。何棟かの宿舎に分散して生活し、朝九時に作業開始となった。夕刻、疲れ果てた学生たちが戻ってくる、我々食事当番の賄いの作業が忙しくなるのだった。医専生の中には中国人学生が十人ほどいたが、彼らは新生中国の高官の子弟たちで、品格があり、就寝までの時間にバイオリンやマンドリンでクラシックを演奏して楽しんでいた。その頃の日本人学生にとっては、西洋の楽器を奏でる雰囲気ではなかった。戦局が一段と悪化する中、そんなことをしていると非国民扱いされるところであった。三カ月の間に一度だけ帰宅を許されたことがあったが、早速先輩から煙草を買ってくるように頼まれた。それはまだ良い方で、もう一人の先輩からはラブレターを渡すことを頼まれ、参っ

てしまった。旅順市役所に勤めているSさんという人で、どうしようかと大分ちゅうちよしたが、玄関に呼び出してもらいラブレターを渡した。なかなかの美人でびっくりしてしまった。後になって友人の妹と分かった。苦勞して引き揚げ、銀座で美容師として働いていたが、若くして亡くなったそう。その後、ラブレターを依頼した先輩に会う機会があったのでその話をしたが、全く覚えていないと言われた。五十年前には、あんなに熱をあげていたのにと、私の方ががっかりした。三カ月の勤勞動員期間中に、日本本土の各主要都市は、B 29による大空襲を受けて灰と化してしまったようだ。四月には米軍が沖繩本島に上陸し、戦局は悪化の一途をたどっていった。医専では七月から授業が始まった。生理学、組織学、解剖学、医化学と、スピードをあげて講義は進んだ。救急医療として、人工呼吸、マッサージ、三角巾、包帯、副木、止血等、戦陣にすぐ役立つような訓練が続いた。時節柄、参考書も少なく、教授の講義を真剣にノートにとるだけだったが、ドイツ医学が主流だったので、一カ

月も経つとノートはドイツ語とラテン語で埋まった。

八月六日には、広島に新型爆弾が投下されたとのラジオ放送があった。後にこれが原子爆弾であることを知ったが、それがどんなにすごい威力を持っていたのか、当時は想像もつかなかった。しかし、それよりも八月八日のソ連軍の対日宣戦の方が、びっくりさせられた。その頃には、関東軍の精銳部隊は南方戦線に向かっていた、満州地区にいるのは老兵ばかりになっていた。数年前に、関東軍倉庫に勤勞動員で行ったが、そこには武器らしい武器はなく、防寒の衣類を見かけただけであった。要塞山の裏手の丘で、戦争を交えた演習を見たことがあるが、迫力は感じられなかった。ソ連軍が国境を越えてくれば、数日で旅順に到着するだろうし、日露戦争の仕返しで大激戦地となるだろうと考えたり、遠くソ満国境に近いハイラルに住む長姉一家の安否も気にかかり、内心びくびくして不安が募ってきた。翌九日には、ソ連軍は満州に侵入してきた。大半の高等専門学校の学生は、急ぎよ召集されて新京（長春）方面へ向かった。兵役のない学生は、い

つものように登校して、長崎に原子爆弾が投下されたことを知らされた。広島島の惨劇はその後の報道で知ったが、その痛ましさに、これからの日本はどうなるのかとますます不安になっていった。

八月十五日は、いつもどおりに登校した。ソ連軍はどこまで南下してきているのだろうか、残った学生もいよいよ出陣となるのだろうか、などと学生間でささやかれていたが、正午に重大発表があるとお達しが出た。放送が開始され、初めて天皇の声を聞いた。よく聞き取れなかったが、「これ以上戦禍が拡大しないように終止符を打つ」という敗戦のお達しであることは分かった。その日は悔しくて涙が出たが、だんだんとほっとした気分になり、「これで良かったのだ」と思えるようになってきた。その日から中国人街では、軒並み中華民国の青天白日旗が翻った。我が家のすぐ近くに、忠海町という中国人街があったが、日本の敗北を予期して準備していたのか、青天白日旗が一斉に翻った。また、各地で暴動が起きたり、郊外の警察派出所の警官が殺されたということも伝わってきたが、

ここは近所の中国人街とは昔から良好な関係を維持していたので、平穏であった。

日本敗戦、連合軍の勝利という事態になり、今まで真面目に働いていた中国人の使用人が、ぱったりと来なくなつた。勝戦国民となつたので、敗戦国の日本人のところで働くことは、気まづくなつたのだろう。しかし、心配して時々そつと訪ねて来たりしていた。

終戦の日から三日目に、早くもソ連の先遣隊が旅順要港部に進駐して赤い国旗を掲げた。その翌日には、町内会を通じてソ連軍司令部の通達があり、保有しているラジオの供出を指示された。何人かで大八車に山のようにラジオを積んで、元日本の高等法院に開設したソ連軍司令部に運んだ。それ以降、電波によるニュースは途絶えてしまった。

市内周辺は危険になつたということで、鮫島町の斉藤商店の一家と古賀さん一家が、我が家の二階と天井裏に住むことになつた。それから旅順高女の寄宿生だった寺岡さんが、自宅のある白城子ハクジョウシに帰ることができず、保証人である我が家の同居人となつた。さら

に、静岡県焼津から旅順工大に来ていた下村さんが、県人会の会長であった父を頼ってきた。その時、三人の学生もついてきたので、結局我が家族を含めて十一人の大所帯で、避難行動を共にすることになった。私は下村さんと二人で、中国人街にある露店で日本陸軍の新品の軍靴を売っていて、サイズもちょうど良かったので買ったことがあった。丈夫にできていたので、その後労働するときに大変役立った。市内は至って平穩で、通りの人影はまばらで、用がないときはみんな家の中に閉じ込められるようになった。

八月二十二日だったか、ソ連軍のパレードがあるというので、乃木町の交差点近くに行つて恐る恐る眺めていると、軍楽隊を先頭に迫力ある行進がやつてきた。兵隊の大部分が、マンドリンと言われている自動機関銃を背負つて、足を高く上げ整然と行進していた。途中、まさに鉄の塊のような重戦車部隊が、ごう音を立ててやつて来た。以前に見た日本の戦車は、鉄板を張り合わせただけのように見えたが、それとは全然違うソ連の戦車を、ただ呆然と見ていた。その日か

ら、市内にはソ連兵が増えていった。

旅順医專の元海軍軍医中將である向山校長は、附屬病院の備品は一本のペンでも全てルールどおりに引き渡さねばならないと言われて、学生を幾班かに分け、日夜病院の警護に当たられた。正門前で監視していたソ連兵は、年の頃二十歳くらいであったか、愛想も良く、銃の説明などをしてくれた。二区の看護婦詰め所に時々顔を見せる下士官兵がいたが、彼も愛想が良く、黒板に字を書いているコミニケーションを図ろうとしていた。ある晩、ソ連軍將校が一区の病室に入つてきて、入院中の女性患者に暴行するという場面に遭遇し、親友の田辺君たちと抵抗したが、院内で銃を乱射されて逃げ回つた。この事件で学生仲間には被害はなかったが、患者の女性は亡くなられたと後になって聞き、本当に気の毒なことで悲しかった。また、看護婦寮を守っていた仙頭君がソ連兵に立ち向かつて、顔中血だらけにして戻ってきたこともあった。夜になると、高台の方から女性の悲鳴が聞こえることもあった。

そのころ我が家にも、玄関をぶち壊して二人の将校が侵入してきた。時間的には三十分か一時間くらいだったと思うが、家の中を探し回って帰って行った。我が家には十一人がおり、さらに二家族が同居していたが、その中には若い女性もいたので不安であったが、その日は無事に済んでほっとした。後で考えてみると、これは威嚇偵察だったようだ。翌日昼寝をしていたとき、物音に気付いて起きたところ、二人の若いソ連兵が部屋中を物色していた。私を見て「チャスイ、チャスイ」と言って、時計を催促してきたので、私は大切にしていた時計を手放してしまった。その夜床に入ったとき、前日壊されて修理したばかりのドアを、ガタガタと再び壊す音がした。私は布団の中でぶるぶると震えていた。彼らは家の中に入ってくると、ピストルを手に女探しを始めた。よく見ると昨日来た二人の将校に間違いなく、肩章はカピタン（大尉）であった。私はとっさに女学生の寺岡さんが危ないと感じて、一時は捕まりそうになったが工大生たちが間に入ってくれたすきに、彼女の手を引っ張って庭に裸足

のまま飛び降り、二メートルほどの塀を乗り越えて敦賀町方面へ突っ走った。頃合いを見て恐る恐る戻ったが、家の連中は皆無事だったので安心した。翌日にまた、玄関の修理をして、もう来ないだろうと思っていたら夜になってドアを壊す音が聞こえてきた。三日連続である。今度は、早めに女性を天井裏に避難させた。またもや同じ二人連れであったが、その夜は大荒れですごく手荒かった。家に入るとまず電話線を切断し、二階に駆け上がり待合室のシャンデリアをピストルで破壊し、父を投げ飛ばして、診療室の引き出しを片っ端から開け、めぼしい物を盗んで行った。

以後、父の医院には日本人の患者は一人も来なくなった。齒の治療どころではなくなったのだ。そのかわり、どこで知ったのかソ連兵が大勢来るようになり、待合室や診療室、薬局は兵隊で埋まり、煙草の煙がもうもうとする中での診療であった。従業員は誰も来なくなったので、私が父を守るため側に寄り添っていた。ソ連兵は、独ソ戦が終わって満州に直行してきたせいか、身なりは汚かったが、どこで手に入れたの

か金塊や金時計を使って金冠を入れて欲しいという注文をする人が多かった。父と二人で、英語とにわか仕込みのロシア語を交ぜ合わせた奇妙な会話で、何とか意思を通じ合わせていた。人混みの中での仕事だったので、警戒が行き届かず金庫ごと盗まれてしまい、銀行の通帳もなくなってしまうこともあった。時には、「ニエツト、マテリアル」だから仕事はできないと断ることもあった。

一人の品のある将校が「玄関にこれを張りなさい」と言って、ロシア語で書かれた「歯科医院、ズブノイ、ウラーチ」という看板を持ってきてくれた。

八月の終わりから九月の初め頃のある日、近くの忠海町の中国人街の通りに、囚人服を着た数百人の人たちが行進してきた。中心地で停止し、長い演説の後にその場で解散釈放された。その囚人たちがこれからどのような行動にでるのだろうか、その夜は恐ろしくて眠れなかったが、幸い被害は何もなかった。恐らく彼らは政治犯だったのだと思う。

九月になると、新市街の住民は旧市街に移動するこ

とになった。我が家は相変わらずソ連兵の来診で、てんてこまいの忙しさであった。三日連続で侵入してきた二人の悪者カピタンは異動になったのか、その後は姿を見せなかった。恐らく、また別の場所で悪さを働いているのだろうと思った。世間も少し落ち着いてくると、しばらく姿を見せなかった中国人の魚の行商のおじさんがやってきた。長年、二つのかごに新鮮な魚を入れ天秤棒で担ぎ、威勢良くやって来ていた。母が魚屋に「そのうち日本人はいなくなるから困るね」と言うと、「犬がいなくなって熊がやってくる。私たちがどうすることもできない、没法子（仕方ない）よ」と言っていた。九月の中旬を過ぎると、旧市街の人たちも大連への移動が始まった。長年親しくしていた人たちとの別れは本当に寂しいものだった。荷馬車に荷物を積んで、四十キロメートル余りの行くあてのない旅立ちである。街中が空き家だらけになってしまった。

十月の終わり頃、旅順市政府から大勢の役人が来て、我が家の玄関、診療室等数カ所を封印してしまっ

た。十一月三日には市政府に明け渡し、大連へ移動することになった。同居人全員が、それぞれリュックサックに必要な物を詰め込んだ。父は、今後の生活のことで頭がいっぱいだったことだと思う。母は、鍋、釜、食器、寝具等を最小限にそろえ、自分の物はほとんど考えていなかった。私はとっさに写真は二度と手に入らないと思い、アルバムの写真を片っ端からはぎ取り袋に詰め込んだ。約束の時間にやって来たトラックに、全員が乗り込んだ。私たちは、もう二度と来ることはないだろうと、複雑な気持ちで我が家と別れた。旅大道路の北路線を通ったが、土城子トウジョウシと周水子シュウスイシの飛行場にはソ連の戦闘機が並び、周辺の小溝には何か所かに死体が横たわっていた。大連市内に入り、松山台の高級住宅街の山泉さんの屋敷前で、トラックは止まった。この主人が出張中に終戦となり、女、子供だけの所帯では心細いということで、部屋を貸すことになったようだ。玄関脇の応接間に荷物を置き、二階の部屋で寝ることになった。隣の広間には、一足先に着いた旅順病院内科の加来先生一家が間借りしてい

た。その夜は、疲れて皆ぐっすり寝込んでしまい、翌朝起きてみると便所の窓が壊され、玄関のドアが空いたままになっていた。応接間を見ると、昨日置いた荷物の大半がなくなっていた。夜中に強奪されてしまったのだ。その後、今度は近所の田中さんの家の部屋を借りることになった。田中さんも終戦前にヘルピンに出張したまま連絡がとれず、奥さんと小学生の二人の子供で生活していたが、心細いから来て欲しいと言われ、十一人皆で移ることになった。母を除くとほとんど男ばかりだったので、女学生の寺岡さんばかりいそうだった。白城子の両親とは連絡がとれないままだったし、責任上、危険な外出はさせられなかったし、彼女が時々しくしく泣いているのを見るのはつらかった。

この頃、この辺りにはやたらと「ポロ買う、ポロ買う」と不要品買いの中国人が天秤棒を担いで声を張りあげていた。中には、すぎあらば盗みをする不徳な輩もいた。それを防ぐために、工大生と庭に電線を張り巡らし、少しでも触れるとベルが鳴るような仕掛けを

作った。夕方、作業の続きをしようとした時、私は腰にすごい衝撃を受け倒れてしまった。太い丸太ん棒で勢いよく突かれたような感じだった。立ち上がることもできずに、這って家に入り腰の辺りを触ると、腰椎の突起らしいものが出ている感じであった。てっきり腰椎損傷だと思ったが、全然歩けないので父に背負われて外科病院へ行った。外科で診療してもらったところ、三十八式の小銃弾が摘出され、腰の痛みも急に楽になった。誰が撃ったのか、直撃弾か、流れ弾か、皆目分からず、その後数カ月にわたり通院することになってしまった。ちょうど十二月で、気温が氷点下となるような季節だったので、かなり厚着をしていたのがいくらかクッションの役目になったらしく、骨盤で弾が止まったのは不幸中の幸いだった。

その頃、消息不明だった寺岡さんのお父さんが、白城子から数々の危険を乗り越えて尋ねてきて、涙の再会をした。私の両親は、娘さんを無傷でお渡しできて嬉しいと言って涙した。寺岡さん父子の無事を祈って別れた。

ある日、朝から出掛けていた父が夕暮れになっても帰って来ないので、心配になった私は、人通りの全くない中央公園に沿った道を捜し歩いていたら、体の大きな中国人が二人、父を捕まえ強盗をするところであった。私は、とっさに大声を張りあげたので、犯人はそのまま退散した。もう二、三分遅かったら、身ぐるみはがされていたに違いない。

真冬になり、寒さが身にしみるようになってきた。持ち物もないし、懐も寂しくなりつつあった。偶然に出会った小学校の同級生の平野君が、寺兒溝にある大豆工場を紹介してくれた。仕事は釜の石炭たきで、夜勤であった。朝になると灰が山のようにたまるので、それを釜の下に潜ってかきだし、一輪車に乗せて処分場に運ぶのが仕事だった。かなりの重労働であったが、生活の足しになればと頑張った。仕事が終わると、朝食としてパンをかじりながら、九時から始まる医学の講義を受けに、すすけた顔で医専に向かった。医専は唯一講義が許可されており、中国人学生も七、八人が出席していた。

避難生活が続き、引揚げがいつになるのか見通しのつかない中で、家族十人の生活を背負っていた父は、春日小学校の近くの松原さんの鉄筋二階建ての一階部分を借りて、診療所を開業する計画を立てていたようだった。松原さん宅には、七十歳くらいのおばあさん姉妹が住んでいたが、この方たちは戦中に戦闘機一機を寄附したとのことだった。二階にはもう一人、満州国陸軍獣医学学校の元校長、竹富中将が住んでいた。威厳があり、日本刀を床の間に堂々と飾っているような人だった。

一階は事務所向きの部屋で、歯科の治療用ユニットは一中近くで開業していたクリスチャンの坂東先生が提供してくださった。大連市内で開業の諸先生から器具、薬品をいただき、看板は旅順にいたときロシアの将校が書いてくれた文字を拡大して使用した。開業しても暇な日が続いた。同居していた四人の工大生は、ふん尿処理や運送屋などの肉体労働に出掛けた。中学一年の弟は、朝早く問屋で煙草や落花生を仕入れ、手作りの折り畳み式の台に乗せて売り歩いた。不

定期にやってくる中国人の子供たちに荒らされたり、盗まれたりしてかわいそうだった。甥の小学二年の恭と小学一年の威も芋の粉で作った饅頭を「いかがですか」と、けなげにも通りで売り歩いて家計を助けていた。二階に住む中将閣下は、乳業会社と関係があった。豆乳が手に入ったので、一緒に玄関前で売ったこともあった。

二階のおばあさんのところで、ちょっとした事件があった。大切なお札がなくなっただけというのだ。貧乏な我々に疑いがかかるのは当然だった。そこで工大生の下村さんと二人で捜すことにした。おばあさんの言う床の間辺りから捜し始めたところ、下村さんが「あった！」と叫んだ。ズタズタにかじられたお札が見つかった。犯人は何とネズミで、破れたお札を銀行に持って行ったが、いくら戻ってこなかったそうだ。

市内には満州の奥地から避難してきて、赤ん坊を背負い幼子を連れて物乞いをしている人や、麻袋を着物代わりになっている人も見掛けた。浪花町の繁華街では、持ち物を処分しようとする人や、売り食いをする

人であふれていて、それを安く買おうとする中国人やロシア人が群れをなし、活気を呈していた。その反面、詐欺や強奪に遭う人がいたり、あらかじめ壊れた電球や花瓶を袋に入れて、わざとぶつかり弁償を求めるといふ悪辣な人間も横行していた。親友の田邊君と、練炭と炭団をリヤカーに積んで売り歩いたこともあった。また、鎮痛解熱剤のアスピリンを売るため薬局を回ったこともあった。その帰り道、一人の日本人が若い二、三人の中国人に囲まれて殴られていた。「支那人」と言ったことが原因らしかった。中国人は、支那人と言われるのが嫌なのだとわかり、その時以降私も使わないようにした。

大連に来て半年経った四月下旬、腹痛を一週間我慢していたが、限度に達して満鉄病院で診察を受けたところ虫垂炎と診断され、四月二十九日入院し、即日手術してもらった。しかし、一週間過ぎても起き上がるのが大変で、しかも傷口がほつれてしまい、以後長く通院することになってしまった。

五月になり、アカシアが咲いて甘い香りが漂う頃、

「日本人と結託して悪行をした」と書いた紙を首に掛け、さらに罪状を書いた長いとんがり帽子をかぶせられた中国人が、トラックに乗せられドラや太鼓にはやしたてられながら、見せしめのため通って行くのを何度か見掛けた。また、人民裁判があるという知らせを聞いたが、見に行く気にはならなかった。

二年目の冬がやってきた頃、やっと日本への引揚げが開始された。私たちの町は、引揚げの順番が遅くなりそうだとの情報も伝えられた。こちらで最後の仕事をと思い、引揚者の検疫に関わる仕事をすることにした。検疫の仕組みとして、引揚者はいったん収容所に入り、順番に三つの部屋を通ることになっていた。まず最初に脱衣室で裸になり、脱いだ衣類を風呂敷に包みアルバイトの我々に渡す。我々は、その風呂敷包みを大型の滅菌消毒器に入れ、スイッチを入れる。裸の人は、次の部屋でシャワーを浴びて三番目の部屋に行き、消毒済の風呂敷包みを受け取り、そこで服を着て引揚船に乗る。何万、何十万の人たちは皆帰国に際して、この道を通って大陸を離れて行ったのである。こ

の仕事は大変な労働だったが、外地での最後の思い出として今でも鮮明に覚えている。

私たち家族は、昭和二十二年三月七日、大連から「栄豊丸」に乗船した。狭い船室に衰弱した体を横たえた。術後十カ月になるが、虫垂炎の傷口はまだ開いたままで時々痛みと共に排膿があり、タオルで押さえるしか処置がなかった。三月十二日、日本の緑豊かな島々が見え始め、嬉しさと安堵感が込み上げてきた。博多に上陸してDDTの消毒を受けた後、既にハイラルから引き揚げていた姉、復員して病院勤めをしていた義兄と涙の再会をした。預かっていた姉の二人の子を無事に渡し、しばしの別れとなった。その時二人が「おじいちゃん、おばあちゃん、死なないでね」と言った言葉がいまだに忘れられない。

博多の収容所での手続きが終わって、引揚列車に乗り静岡に向かった。列車内は身動きもできないような混雑だったので、静岡駅に着いた時にはぐったりとしてしまい、駅前のバラック小屋で一夜を明かした。駅前から初めて見る富士山は、私たちの気持ちのせい

か、かすんで見えた。翌日、藤枝駅から父の実家に向かって足を進めた。私は二、三メートル歩いては休むほどに体力が落ちていた。父は予定を変更して途中の志太温泉に寄り、垢を落として実家に行くことにした。いくらもお金を持っていなかったのが皆は心配したが、あまりみすぼらしい格好で実家に戻りたくないかったのかもしれない。実家は快く迎えてくれたが、父は再起のために静岡へよく出掛けていった。私は近くの葉梨川の土手や学校の校庭で、将来のことを考え込んでいた。一時期、静岡市の朝日新聞専門店で働いたが、いつも家の再建をしたい気持ちが頭から離れなかった。結局は二人の姉の援助もあって、歯科医師の免許を取ることができた。

いろいろな体験をして、四十年間よく働いたと思う。現在は身障者となってしまったが、後継者もできず、平和な世の中になって本当に嬉しいことである。